

調査資料 NO49

サン・パウロ州における  
戦後雇用農の概況

1965年3月



海外移住事業団

国際協力事業団

受入 月日	84. 8. 21	703
		81
登録No.	13340	EM



## ま え が き

日本からの海外移住といえば、まず、ブラジル国があげられる。特に、その内においても南伯地域、即ちサンパウロ州を中心とした地域が日系人の活躍の場であり、また過去50年にわたる開拓の歴史のかがやける場ともいうことができる。

日系移住者が同地域で果たした役割は、今更述べるまでもなく、目覚ましいものがあり、1958年の「ブラジル日系人実態調査」においても、ブラジルの総農業人口の約0.7%と推定される日系農家が、ブラジルの総農業生産の6.7%にあたる生産をあげコーヒー5.9%、棉11.6%、落花生3.9%、鶏卵11.6%、馬鈴薯2.7%、トマト61.7%といった比率を占めていることは頼母しい限りである。

戦前、南伯地域に入った移住者は、コーヒー園のコロノとして就労し、多くの苦斗を重ねて、今日の広大な耕地を所有し、現在では、順次機械化を取入れ合理的営農に向いつつある。

戦後、移住が再開され、日本人が渡伯できるようになるとともに、呼寄による雇用農として多くの人々とが同地域に移住したのである。

これら移住者のその後の状況は、分散配耕または転住等により、その実態はなかなか把握できなかつたのであるが昭和39年当事業団サンパウロ支部は、サンパウロ州における雇用農の調査を行ない、この調査を通じて見られた概況にもとづいて、担当者の経験とを合わせて、業務の参考のために取りまとめたものである。

1965年3月

業務第2部

# 目 次

## ま え が き

I 雇用農の一般概況	1
1. 雇用農の移動について	1
2. 戦後移住者の農家型態について	2
3. 賃金および生活状況について	4
4. 雇用農の独立農への動きについて	6
II サン・パウロ各地帯（各線）別概況	8
1. 中央線地帯	8
2. 聖南地帯	8
3. モジアナ線地帯	10
4. アラクワラ線地帯	11
5. パウリスタ線地帯	12
6. ソロカバナ線地帯	13
7. ノロエステ線地帯	13
III 受入側と雇用農側の考え方	15
1. 戦前移住者の戦後移住者に対する批判と期待	15
2. 戦後移住者の戦前移住者に対する考え方	16

## 付 表

サンパウロ州地区地図

## I 雇用農の一般概況

雇用農の集中度は、近郊に厚く奥地に薄い、これは奥地に導入された戦後移住者は、現在において既に土地購入の自営農か、借地農となっており、この見通しに立たぬ者はサンパウロ市近郊または周辺都市に移動する傾向があるからである。

### 1. 雇用農の移動について

雇用農として入植したものは、その独立過程または入植条件の問題等から移動する可能性は非常に強い、そこで今回の調査において見られた移動状況の概略は次のようである。

#### (1) 移動回数

移動回数については最高8回までの事例が見られるが、大体は1回乃至2回の移動が最も多く約63%を占める結果となっている。

なお、移動するものの90%は、雇用農および歩合農であつて、独立農は殆んどみられない。

#### (2) 移動の理由

移動の主要な理由は、一日も早く、雇用農から脱却して、歩合農あるいは借地農を経て自営独立農に移行したいと希望するためである。

具体的には、生活困難、低賃金という理由が多く、バトロンとの条件のくい違い、子弟教育上の問題あるいは文化生活をしたいという理由がこれに続く。

雇用農としてスタートしたものにとつては、借地農、自営農へと移住することを希望することは当然であるが、必ずしも短期間にその目的を達成することは容易ではないが、この間に、個々の習慣、言語、農法、市場性等につき貴重な体験を重ねることとなるのである。

#### (3) 移動地域

雇用農移住者が、奥地帯乃至中部地帯から、サンパウロ市近郊および主要都市周辺へ移動することは前述の移動理由からもうかがわれる。

すなわち、子弟教育の便のよいこと、日系人の多いこと等に起因するものと思われる。更にまた近郊という市場性の面からも、野菜栽培等の様に比較的、小面積で小資本で、資本の回転の早い面からも入り易い条件を具備しているといえる。

#### (4) 移動回数からみた独立状況

独立した移住者を移動の回数からみると、1回～4回までの移住者が高率となっており、殊に1回～2回が55%近くを占めている。余り多く移動することは決して、独立の成果を高めるものではないということができよう。

2. 戦後移住者の農家形態について

(1) 農家形態

戦後雇用農として移住したもののうち、調査時における農家形態は次の様なものであつた。

(979世帯の調査例)

農家	}	独立農	約 25%
		借地農	" 29%
		歩合農	" 21%
		雇用農	" 16%
非農家		" 9%	

以上に見られるとおり、借地農、独立農が実に半数以上を占めている。

(2) 分益農条件

職種別にみた、契約条件は実際には各自種々取極めているが、大略第1表の通りである。

また、雇用農についても農村労働法などから、雇用者との紛争を避ける意味から、極力常用雇用をへらし、日雇を使うか、あるいは分益農、借地農を入れる方式に変わりつつある。

第1表 請負および分益農の契約条件

職 種	近 郊 の 条 件	奥 地 の 条 件
蔬 菜	整地および耕地内運搬費は耕主負担、使用人夫賃小農具は移住者負担。 肥料、種子、営農経費、出荷費等は50%宛負担。 生活費、営農経費等は前貸する。純益50%分益。	近郊に同じ。 ほかに余作地無償貸与。
果 樹	肥料は耕主負担、除草、施肥、剪定、その他の手入れは移住者負担。 出荷費は50%づゝ負担、生活費は必要額を前貸する。 純益50%分益。	近郊に同じ。 ほかに余作地、間作地無償貸与。
養 鶏	1) 採卵鶏の場合(雄より	近郊に同じ。

職 種	近 郊 の 条 件	奥 地 の 条 件
	<p>産卵までの契約) 鶏舎を請負う。生活費、必要経費は前貸する。利益は50%分益。ただし鶏糞については種々の配分方法がある。</p> <p>2) 若鶏専門の場合 雛より82日～85日で売却するまでの飼育。利益は移住者40%が多い。</p>	<p>移住者60% 取得の条件もある</p>
雑 作	<p>整地、灌水設備、機械類は耕主負担。肥料、種子、農薬、営農費、出荷費は50%。生活費は前貸する。純益50%分益。</p>	<p>近郊と同じだが、分益率が60%(移住者取得)が多い。他に余作地も無償貸与または作物の一部を与えるところもある。</p>
コ ー ヒ ー	<p>なし。</p>	<p>除草、採集を含めたコーヒー園管理一切を移住者が行い、受持区域よりの全収穫量の30%を取得する。普通、2カ年以上の契約を行う。(コーヒーは、1年おきに豊作・不作になることが多いから)</p>
茶	<p>なし。</p>	<p>整地、施肥、機械類は耕主負担。移住者は除草収穫及茶園管理一切を行う。収量1Kgに対し20～400円\$の歩合を支払う。</p>
花 卉	<p>芽摘み等の技術者の場合は、給料+歩合、または歩合のみで仕事をして</p>	<p>なし。</p>

職 種	近 郊 の 条 件	奥 地 の 条 件
	ているものもある。歩合は前者の場合20%～25%、後者の場合は60%。	
養 蚕	なし。	茶園、蚕室を耕主が提供、移住者は全て自己負担で行う。必要経費は前借りする。利益は70%～80%移住者取得。

(3) 借地の取決め方法

大体次の4種に大別されるようである。

- ア 各年の借地料を取決めるもの。
- イ 数年間の契約をし、毎年借地料を取決めるもの。
- ウ 借地料を売上総額の歩合で支払うもの（大体歩合率は10%～30%）
- エ 無料で貸与、数年後に牧草を植えて返却するもの（これは原始林を開発する場合が多い）

3. 賃金および生活状況について

- (1) 労働賃金は需要関係によつて地域的に多少変化があるが、調査を通じてみられた既要は第2表の通りである。



第2表 地域別主作物と雇用賃金

地域	主作物資金	主作物	雇用賃金（食事なし）	
			日給 Cr\$	月給 Cr\$
1. サンパウロ市近郊				
サンパウロ周辺		蔬菜、果樹、養鶏	1,000~1,500	42,000
サントアマーロ、マウア		蔬菜、トマト、ジャガイモ、キヤベツ	1,000	殆んど請負
イビウナ		ジャガイモ、トマト	900~1,000	"
ジュンジャイ		ブドウ、花卉、アルファセ	1,000~1,500	40,000
スザノ		蔬菜、養鶏	1,000~1,500	
モジダスグルーゼス		養鶏、果樹、蔬菜	900~1,200	
ブラガンチーナ		コーヒー、ジャガイモ、果樹、牧畜	1,000~1,500	
2. 中央線		蔬菜、米、ジャガイモ、トマト、養鶏	600~700	42,000
3. 聖東地域		漁業、バナナ、茶、米、パイナップル	1,000~1,200	40,000
4. モジアナ線		トウモロコシ、棉、落花生、米、コーヒー、牧畜	1,000~1,300	40,000
5. アララクワラ線		米、コーヒー、サトウキビ、落花生、棉、ひま、牧畜	1,000~1,400	40,000
6. ノロエステ線		養蚕、トウモロコシ、コーヒー、棉、落花生、米、牧畜	800~1,000	
7. パウリスク線		養鶏、養蚕、落花生、棉、ジャガイモ牧畜	800~1,000	40,000
8. ソロカバナ線		トウモロコシ、トマト、ジャガイモ、葉野菜、牧畜	700~900	40,000

- (2) 労働時間は、農業の性質上8時間の原則はなかなか遵守されていないようである。
- (3) 雇用主によつては、調味料、生活必需品等を組合等から購入し、雇用者に支給し、月々の賃金から差引いているものもある。食費については、単身青年以外は、自家生活で、野菜等は、概ね自給自足の形をとっている。しかし、養鶏雇用の場合は割卵を月に1ダース程度支給を受けたりしている例もみられる。
- (4) 食事は殆んどが、米食であり、副食も日本の食品が多く使用されており、味噌、醤油、味の素等の調味料が広く使用されている。

また、かなり広範囲を地域にわたり、豆腐や干魚等も入手される。

- (5) 住宅については、一般にサンパウロ近郊より奥地帯の方に割合小綺麗なものが多い。それは、労働者不足ということからも、住宅の面でも、より魅力あるものとしておく必要があるからである。

近郊、奥地とも大体部屋は3部屋程度のものである。

- (6) 娯楽面については、各地の日本人会による運動会、慰安会が時折ある。また組合・日本人青年会による日本映画が月1度位上映される地帯が多い。

#### 4. 雇員農の独立農への動きについて

- (1) 独立に至る最も重要な要因は、家族構成の良好なことであり、従つて幼児を抱えた30才代の夫婦が、一番苦しい状態にあるとみられる。

調査によつても、家長が45才位以上の移住者は殆んど安定しつつあつた。

- (2) 渡伯入植後、比較的早く自営独立に達した者は、推行資金を比較的多く持つて来たものか、バトロンとの縁故関係のある者に多い。従つて携行資金をなるべく多く持参し、かつ活用することの上手なものほど独立への道は早いといえる。

近郊における土地価格は、地区により異なるのは当然であるが、アルケール当り凡そ300コントス～2,000コントス位の地価相場である。サンパウロ市から約100Kmの地区で、公道から20～40Km入つたところの平均500コントス前後の土地購入による独立に必要な経費を参考までに概算してみると、

土地購入費	3アルケール	1,500,000
〃 開墾費	当初0.5アルケール	200,000
〃 登記手数料等		200,000
家屋建築費		200,000
農機具購入費		
揚水ポンプ	6馬力	800,000
動力噴霧機	3馬力	500,000
小農機具等		100,000
肥料及び農薬代	3ヶ月分	300,000
農作業人夫賃	1人×Cr\$1,000×50日	50,000
生活費 (収穫まで)		150,000
合 計		Cr\$ 4,000,000

以上約4,000コントス(約80万円)が見積られる。

借地の場合でも、アルケール当り1年分20～40コントス前後であり、借地契約書登録費10コントスで他は購入と同様に見積られる。

(3) 地区別地価、借地料の概要は第3表の通りである。なお、地価は交通条件その他によつて同一地域でも相当の開きが見られる。

第3表 サンパウロ州地域別土地価格(時価)および年間借地料

1964. 5. 31現在

単位 コント

地 域	土地価格 1アルケール当	借地料 1アルケール当
1. サンパウロ市近郊		
サンパウロ市周辺		20 ~ 30
サントアマー、マウア地区	600 ~ 1,000	20
イビウナ	300 ~ 400	18 ~ 25
ジュンジャイ	1,000	50 ~ 100
スザノ地区	1,000 ~ 1,500	20
モジダスクルーゼス(カツペーラ)	1,000 ~ 1,500	20 ~ 30
" (コツケーラ)	1,500 ~ 2,000	20 ~ 40
2. 中央線沿線	1,000 ~ 1,500	40 ~ 50
3. 聖南地域	300 ~ 500	20 100(サントス)
4. モジアナ線沿線	1,000 ~ 1,500	150 ~ 200
5. アララクワラ線沿線	1,000 ~ 2,000	200
6. ノロエステ線沿線	1,000 ~ 1,500	
バウリスタ延長線	600 ~ 800	
8. ソロカバナ線	200 ~ 300	40

## Ⅱ サンパウロ各地帯（各線）別概況

### 1. 中央線地帯

- (1) タウバテ、ピンダモニャンカーバ、およびその奥地帯は、トレメンへの鐘ヶ江工場以外は（戦前の移住者で、30年間雇用農であるという特殊例もみられたが）戦後移住者の雇用農は非常に少ない。

本地帯の戦後移住者の大多数は各都市周辺の蔬菜借地農である。その借地面積は $\frac{1}{2}$ アルケールから1アルケールが大半であり、その生産物の半数は附近の都市へ出荷し、残りは、サンパウロ、リオの市場へ出荷している。赤字経営、あるいは投機的経営は少く、小規模経営ながら安定している。

本地帯の入植者の大部分は、他の地区へ移動を希望せず、 $\frac{1}{2}$ アルケールでよいから、自分の土地をもち、安定した営農を希望している。

- (2) バライーバ河岸低地の土地は極めて肥沃であるが、その殆んどが大地主の所有である為、借地も困難な状況にある。

全般的にみて、日系農業者の生産は、本地域の全農業生産1割程度であると思われる。土地が入手出来れば日本人農業者は更に伸びる余地があろう。

- (3) バライーバ河岸地帯の主産菜である米および牧牛については日系農家が経営しているのが意外に少く、新来移住者には殆んどない。ピンダモニャンカーバで戦後移住者が旧移住者および日系二世の農業者と協同で米25アルケール、ジャガイモ10アルケールを作っている例が見られた。

また、ピンダモニャンカーバにおいて、単独青年が乳牛の飼育をしており、利益は充分上るといふ事例も見られた。

- (4) ジャカレイ地帯は、当事業団の経営するジャカレイ移住地、不動産業者の作った、高森イタベチ、アラカラおよび桜移住地、更にイタケーラの人達の作ったサンターナ植民地等各種形態の植民地があり、今後の植民地経営のモデルケースとして注目されるところが多い。

### 2. 聖南地帯

- (1) 農業関係について

サントスおよびサンピセンテ地区は、ブラジル移住者の上陸第1歩の印象ある地で歴史的にも日系人としても因縁の古い街で、第1回移住者に笠戸丸組も数家族居住しており、二世の活躍が顕著である。人口約60万のうち日系800家族と推定され、沖縄県人が、そのうち約70%を占めている。

日系人は主としてフェイランテ、（露天商の類）、市場に店をもつものが多くそれは野

菜、魚類を扱うものが大半である。また、周辺部の農業は主として野菜栽培である。

戦後移住者は約200家族と推定され、大半は沖縄県人とある。

主作物はシュシュ(瓜の一種)、サヤインゲン、ナスなどで、小面積に集約的に植えつけているもので、コチア、南伯両産組と市場一の仲買業者に出荷している。

現在では、生産物が限定されており、野菜栽培により、日銭を稼いでいる。日々の生活困難者はないが、大きな発展は望みにくいところである。

- (2) サントス〜ジュキア海岸線地帯は、入植者の殆んどが自給自足の形であり、自然的環境、経済条件も悪く、医療教育等に公共施設も良好とはいえず、定着率もよくない。地勢が海岸線の狭き山岳地帯のため機械化ができない。また、平地は地価が高く、かつ再生地のため農業、肥料代は総収入に比し割高となつている。

このような現状から、本地帯は家族労働を中心としたものが多く、資本の蓄積力も少ないと見られる。新移住者は、主に小面積の借地に野菜(サヤインゲン、シロー、その他)を作り、サントス、サンパウロ方面に出荷している。

- (3) サントス〜ジュキア線ムサセア町より以西は、戦前の沖縄出身者が多数を占め、戦後移住者は殆んど親戚、縁故関係呼寄せによる少数に過ぎない。

30数年前から、米、トウモロコシ等の穀物等による半自給自足の生活状況で、換金作物はバナナがその約90%を占めている。この度、国道2号線の開通により若干生活レベルも向上する希望が出てきている。

この地区の人々にはサンパウロ、サントスへの移動が見られ、都市近郊蔬菜またはフェイランテ兼業に転身している実情であり定着率は余りよくないといえる。

- (4) レジストロ市およびその近傍一帯の日本人植民地は茶を中心とする農業を営み、1952年頃新移住者が養蚕移住として入植し現在までに養蚕移住23家族(現在定着9家族、うち独立8家族、分益1家族)、力行会8家族、单身51名(現在6家族が独立、11名の单身独立)、コチア青年120名位(32名定着、うち $\frac{3}{4}$ が独立)のほか、約200家族(20家族独立)の入植者が数えられる。

戦後移住者の概況は、

ア ゴザを作っている入植者は10数家族を数えるが伸びている家族が大半である。

イ 茶を主作物としている入植者は、茶が収穫まで3〜4年を要することから、この間、蔬菜は夏場は不利のため、夏場は開墾や茶作等をし、冬作野菜で1年間の経費を賄い、茶の成育をはかるといふ方策が一般的である。

ウ コチア青年の場合、契約終了後は、耕主の援助を受け、または二世の娘と結婚し、婿家の援助を受けて独立するなど良好な状況を示している。

エ 家族移住者の場合は、通常、歩合作で資金を蓄積し、土地購入のうへ独立する形をとっているが、これらの人々も家族構成の良好なほど有利の様である。

オ この地方では総して旧移住者の新移住者観は割合によく、良好といえる。

(5) リベイラ河流域一帯は洪水等の恐れがあるが、米作に適しており、労働者も不足しないので、米、バナナで収益をあげ、自営農に移りつつある。

(6) イグアツベ地域は、米、バナナ、蔬菜および魚類が主産物であるが、日本人移住者は米、蔬菜に、在来の伯人労働者は漁業に集中し、農業労働者の不足が見られる。しかし、現在国道2号線の開通によりサンパウロ市という大市場と直結するという有利性から、冬期野菜の栽培適地として本地方は、極めて将来性があると当地入植者は明るい表情である。

(7) サントス地帯は、農業以外に漁業関係者も多いので説明を加えておくことにする。

サントス沿岸の漁業者の多くは、戦前移住者であるが、戦後の新移住者の中にも2、3船主になり、沿岸および近海で操業している。

漁獲方式は主に底曳きで、漁獲物は、エビ、イワンなどで水揚収益は1日当り50～360コントス程度である。

近海および遠洋漁業は大洋漁業その他資本をもつた企業で30～150トンのトロール船による、はえなわその他の方式で1日当り1,500～3,000コントスの水揚量といわれる。

最近の傾向としては、漁具の高騰、燃料の値上り、および沿岸魚群の減少化などから、沿岸漁業は不振であり、漁船の大型化、近代化に迫まれており、零細日系漁業は苦しい状況にある。将来の見とおしとしては資本力の大きな船主なら明るいのが、小規模漁業は苦しいと思われる。

大洋漁業関係は、遠洋航海の大型船による操業であり、従業員は比較的豊かな生活を送っているが、同社を退社し、漁業で独立した者は、最近の伯国経済の急進するインフレの影響を受け、不振のものが見られる。

旧移住者の中で漁業経営を行なっている人々は、新来移住者の漁業雇用について、技術面および将来の独立保証などの理由で採用するものはなく、既漁業者以外に、新来移住者からの転換は殆んどないものと推測される。

### 3. モジアナ郷地帯

本地帯は、明治41年の笠戸丸渡航入植者以来の因縁多い地帯で、旧コーヒーコロノとに多数の日本人入植者のはいった地区であるが、昭和3年のコーヒー不況からは、雑作、棉、米作に転換し、今日に至っている。

現在、在住の日系移住者は、本地域からノロエステ、ソロカバナ郷地方やサンパウロ市近郊に移動した移住者の中で残留し、雇用農として着実な営農に精励した人達で、今日では堅実な基盤を築いている。

現在、入植者各人の所有する土地は比較的大きく、特に、牧場利用を大きくやり、そのか

たわら、蔬菜、雑穀、果樹を中心の集約的経営を行なっている。作物は、トマト、ナス、ピーマン、玉葱、キュウリ、ジャガイモ、メロン、西瓜、柑橘等が植え付けられている。

(1) イガラパーバからインベラーバ、グアラアにかけては米、棉、トウモロコシが主であるが、戦後の入植者は、10数家族にすぎず、上記作物の分益農が主である。

(2) フランガ、パタタイス地区における戦後移住者は10数家族であり蔬菜、トウモロコシ雑作の分益農が殆んどある。

特に伯人耕主が多く、日本人農家が歓迎し、好条件で優遇する傾向を示している。例えば伯人労働者を何人使用してもよく、この費用の50%をもち、その他住宅建設あるいは小型トラックの貸与等までみられる。

しかし、この地帯は地価が高く、1アルケール当り2,000コントスで土地購入は難しい現況にある。

(3) リベロン・ブレット市は人口19万、州内奥地最大の都市でサンパウロ市から325Kmの所にある。市内日系人は約260家族と推定されるが、戦後移住者は少く、近親呼寄が主である。

#### 4. アララクワラ線地帯

(1) 本線地帯はかつて奥ノロエステ、ソロカバナ線地帯とともに1920年頃がコーヒーの全盛地帯であつた。1935年の統計では本アララクワラ線地帯はサンパウロ州の27%、奥ソロカバナを合せると実に63%が産出された。しかし、今日、このコーヒーは、消えつつあり、大農場の分割化が行なわれ、牧畜、柑橘、養鶏、米、棉、蔬菜等に変わりつつある。

(2) ジャーレス地区は、土質が暗赤色の砂質土で乾燥した感じであるが、本地区の植民地の日本人会長は、戦後の移住者であり、また同地区の連合日本人会(約400戸)の副会長も兼ね、他地方に比し、新移住者の勢力がなかなか強く、営農成績も良好である。戦後の移住者として定着しているものは、協和植民地、旭植民地と合せて約30家族である雇用農は皆無である。

この地区では、新移住者の一部が若干の余裕ができるとサンパウロ市近郊に土地を求めて移動する傾向がある。これらの人々はトラクター等の農機具を購入せず移動にそなえている。また反面、定着の意志をもつものは、この地方はまだ無肥料でかなりの収穫をあげ得るので借地、分益農をしている間にトラクター等の購入を行ない、独立体制にはいる準備を行なっている。また本地区は伯人労働者が容易に入手できるので資金さえ十分ならば、大面積の耕作も可能である。

(3) カタシズーバ地区、この地帯ではトマト(地這い)栽培で、アルケール当り1,700箱位の収穫をあげている。この附近の新移住者は殆んど歩合農で、これら新移住者はトラクターを持つているものは少なく、馬耕が主である。

- (4) タリアリチンガ地区は、日系人約170家族を数えるが、殆ど分の益農が食住をパトロンに依存した生活をしており、パトロンの営農損益に直接ひびくようである。機械化は取り入れられているが、収穫期の労働者不足により町から雇うこととなり、かなり高額であるので楽ではない。
- (5) 総体的にみて、サンジョゼ・ド・リオ・ブレットより奥地帯においてはブラジルに来て失敗であつたというものは殆んどみられなかつた。タクアリチンガからカンピーナス近くなるにつれ、渡伯は間違いだつたと訴えるものがあり、これらの地帯の歩合作は不安定であるということをも物語つているといえよう。

#### 5. パウリスタ線地帯

- (1) ツビー・パウリスタ、オズワルド・クルース地帯の主作物は生産額順に述べると、コーヒー、落花生、棉、肉牛で、その他少数ではあるが、米、ジャガイモ、鶏卵等がある。

戦後移住者は、主に雑作の分益・借地農が過半数を占め、独立自営農の殆んども雑作および町近郊の蔬菜作りである。コーヒーの自営または牧畜関係を営む者は皆無で、養鶏が若干見られる程度である。

- (2) パストス地帯は、日系人入植の歴史も古く現在600戸の新旧移住者が存在し、新移住者は約80家族を数え、独立自営農は全体の13.5%である。養鶏独立の大部分は日本から多額の携行資金を持つてきたものか、現地の旧移住者と親類関係にあるものである。

調査を通じて分益農のなかでバンデイランテ組合の養鶏村の場合が平均的に最も良好と認められた。

養蚕については、現在割合値もよく良好な状況にあり、プラタク製糸等でも、養蚕歩合希望者があれば、受入れたいという希望を示していた。

- (3) ツツバンからガルサに至る地区は、落花生、棉、肉牛、コーヒー、米、ジャガイモ、鶏卵等で、その生産額からいえば、雑作、牧畜関係が過半数を占め、コーヒー生産高は近年減少の一途をたどっている現状である。

日系人がコーヒー栽培、牧畜に従事しているのは、極く少数であり、日系人入植者の主作物は主に雑作である。

新移住者は総数約50家族以上であり、4～5年前にガルサのサント・エンブー農場に50戸の入植者をみたが1年後には、全員退耕し、その過半数はサンパウロ市近郊へ移動している。また同時期にオリエンテの藤原耕地およびスイツサ農場へ約10戸新移住者が入植したが、これもまた全員退耕移動している。

従つて、現在定着している移住者の大半は、呼寄せと他地区からの移動入植者である。この半数はマリリヤ、ツツバン市などで、ホテル、レストラン、製パン業、自動車修理業、食料品店等を営み、旧移住者顔負けの活躍発展をしているものもある。



- (4) 総合的にみて、パウリスタ延長線沿線のコーヒー雇用農の入植者の79%までが脱耕し、その過半数が、サンパウロ市近郊に移動している事実から、今後も新移住者のコーヒー雇用農としての配耕は、十分な検討を要するものと思われる。

## 6. ソロカバナ線地帯

- (1) オウリンニョスからプレジデンテ・ブルデンテ、ホルト・エビターシオにかけて落花生、トウモロコシ、米、牧畜、養鶏が主であるが戦後移住者は牧畜を除いた上記作物を栽培している。

ここで注目すべきは戦後移住者が、サンパウロ市近郊においては養鶏をやっているものが多いのに比し、この地帯では養鶏を殆んどやっていない。

ソロカバナ沿線に沿って存在する都市の消費めあての各都市近郊蔬菜栽培者の大半が戦後移住者で、プレジデンテ・ブルデンテでは特に多く、大部分が沖繩出身者で親戚等の呼称である。

本地帯の如き粗放の大規模機械化方式を要求される所では、戦後移住者の独立は容易ではない。

- (2) サンパウロ市対象の奥地の養鶏業は近郊養鶏業とのハンデキャップが余りに大き過ぎそこに雇用農として入植しても定着することは難かしいことは当然であろう。

更に、本地帯の農業者の大半は、土地を持っていない関係上ブラジル銀行、サンパウロ州立銀行の融資を受けている者が極めて少ない。

各都市の近郊で蔬菜を栽培している戦後移住者は馬車などで直接町で売り歩いているのが大半で日銭稼ぎの域にあり、市場の狭少、冬期売上げの減少等からも、サンパウロ市近郊へ移動を望むものが多い現況にある。

## 7. ノロエステ線地帯

- (1) アラサ、ツェバ地区からアンドラジーナおよびベレイラパレット地区に至る奥ノロエステ地域一帯は、肥沃な砂質境土の中度の波状形地帯で、雑作地帯としては極めて恵まれた条件下にある。近年新しい農業生産地帯として誕生の途上にあるといわれているが、これは交通網の発展により、広大なノロエステ地帯を中心に、マツトグロツソ、シナスジエイラス、ゴヤス州等を含む巨大な地域の大集散地および商工業の中心地帯と化しつつある。

また、従来の当地域の主要生産物であつたコーヒー樹の枯死老朽および牧場の老廃化、地価の暴騰による粗放牧畜の改革等、営農形態、生産物の変革推移は必然の趨勢にあるといえよう。

- (2) 新移住者の受入については、初期においては相当活発な導入が見られたが、現在、大耕地所有者は上記の変革の過渡的事情と新移住者の移動性の烈しいこと等の理由から積極的な熱

意は見られないが、しかし、一般的には大いに歓迎しようという傾向があり、今後の受入可能性は充分にあると思われる。

- (3) 当地帯の戦後入植者の主作物は、資金関係もあり、棉花、米、ヒマ、落花生、ニンニク、玉ねぎその他雑作、養鶏である。

次に主要地区の概況をみると

- (4) アラサツーバ地区は、奥ノロエステにおける代表的日系大耕主が多数存住し、模範的な農場事業を営んでいる。市内とその近傍に約30戸の新移住者がいるが、アラサツーバ市内および附近の新移住者の内訳は、雑作、蔬菜、養鶏等が23戸市内で洋服店、バー、(軽飲食店)、洗濯店、美容院、自転車修理、日語教師、各1を数え、その他に放送局員3、料亭経営2等である。

- (5) ミランドポリス地区は、地味肥沃のうえに、アラサツーバ、アンドラジーナ両都市の間に位し、コーヒー精選工場や、製綿工場、製糖工場等もある活気ある約3万人の町で、日系人口も約1,000戸と推定される。

本地区周辺の戦後移住者は、養鶏、雑作、蔬菜等の分益、借地農約15戸で市内には魚屋、パル等の商業者が数家族いる。

新来移住者の定着率は低く、他地区からの移動入植者は別として、直接日本からの入植者は一般的に成績がよくない。その理由の一として、銀行融資が受けにくいことがあげられる。(土地所有が条件になっているが、地価が高いため、土地購入が難しい。)

- (6) アンドラジーナ地区は人口約4万の州境の集散都市として、近年急激に発展したが、周辺は大農牧地帯である。日系人は約300戸と推定され、新来移住者は、市の近傍で養鶏・蔬菜、蔬菜・落花生、米作借地農各1戸程度を確認したにすぎず、戦後移住者は少ない。本地区一帯は、大資本家、大農場主等の大農牧地帯で当分は移住者の受入可能性は少ない地域と思われる。この点、奥ノロエステ一帯共通のようである。

- (7) アリアンサを中心とする、ミランドポリス郡内の新移住者の受入状況は、約100家族、50単身が数えられたが定着率は悪く、現在10数家族、単身数名程度が残留しているだけである。しかし、これらの人々との成績は良好である。

アリアンサ地区の日系人は新旧移住者を合せて1,300人位であり、コーヒー、米、棉、ヒマ、落花生、養鶏が主作である。最近連年のかんばつのため雑作が不作続きである。牧畜は乳牛を主としてラク農加工へ移行する機運がみられ、牧場の老廃化の再生への転換が考えられている現状である。更にウルブングガ発電所の完成と相俟つて低湿地利用の灌漑開発計画が考慮されており、将来への見とおしに、本地区への入植は将来性があるものと期待される。

### III 受入側（戦前移住者）と雇用側（戦後移住者）の考え方

調査にあたり、各地において、戦前移住者の戦後雇用側移住者に対する批判と期待および戦後移住者から戦前移住者を見た場合等に対する声を最後の結論として、以下散見された要約を次に述べてみる。

#### 1. 戦前移住者の戦後移住者に対する批判と期待

- (1) 「戦後新来の移住者は、上げばかり見てあせり過ぎ、無理をし失敗する。そして腰が落着かない。」という言葉が戦前の移住者間によく聞かれた。

しかし、これは戦後移住者の質の問題とはいえず、むしろ時代の変遷による人生観、処生観の相違であり、社会的経済的立場を異にする位置の問題である。

この様な評の反面、一般的には、戦後移住者は意欲的、積極的に研究心が旺盛であり、よく働くという点では多くの人々が一致して認めていた。

- (2) 「新移住者は概して勘定高く、経済観念が強いので、もうからなくてもガン張るというよりの意識はない。

そのかわりもうかるという事には研究熱心で積極的によく働く、改良改革なども意欲的に進んでやり、その点刺りきつているやり方には驚嘆する。」

- (3) 「要はもうけさせて、1～2年落ちついてガン張るよう指導することである。そのうちに旧移住者の忠告が自然にかかってくる。もうからないまでも辛抱してガン張れば、先の見通しがつくというふうに指導していかなければ無理だ。食つていけないうような労賃で2～3年も雇用で使うということでは落ち着く筈がない。

受入側も新来移住者に対して1年雇用、2年目から歩合という条件を考慮してやらなければならぬ。また受入側の事業内容、条件等もよく調査して欲しい。」

- (4) 「新来移住者で、新聞種になつたり、問題を起したりするのは、旅行社扱いのものが多いようだ。送り出し、受入に直接責任を負わないから、無責任な事態を惹き起す率が多くなる。形成的な呼寄せで送り出され、サントス、サンパウロで雇主も明らかでなく取引られる様なものは一時収容所に収容することが、送り出しの段階で受入側を充分調査されたい。」

- (5) 「広いブラジルの、あらゆる方面に入つていく移住者達であるから、全て一律に考えられるものではない。地域差というか、ブラジル中どこに行つても何をやつても、渡伯当初の2～3年間が大切なので、まず本人の気持が第一である。

要は不屈な開拓精神を持つた人でなければならない。」

- (6) 単身青年の受入については、奥地帯で次のような意見も散見された。

「一般的に単身青年は奥地向きではない。（日本において多少とも訓練を受けて来たものは別だが・・・・・・）サンパウロ近傍の場合、単身青年が多数あり、かつ周囲に日本人

も多く、一方生活面でも慰安や娯楽等に恵まれている。また受入耕主とも連絡が容易であり、比較的移住者も辛抱するし、長続きするようだ。しかるに、奥地の場合、生活が単調であり、渡伯当初のこの無味索漠に耐えられる青年は極く稀れである。

早いもので1か月遅くも6〜8か月位で耐えきれず都合乃至サンパウロ近傍に移動しようとする。

これでは奥地の場合、雇用主は単身者の渡伯に単に利用されたようなものだ。従つて、現在では、単身青年を呼寄せるときの経費と時間の無駄および計画遂行上の支障から、単身青年の受入が極めて消極的になつている状況であるといえる。ただし、弓場農場、新生農場等（の集団的共同経営農場等）に入れるときは別である。

## 2. 戦後移住者の戦前移住者に対する考え方

(1) 先に述べたように戦前の移住者にうつつた戦後の移住者は自分達の期待していた日本人とは距離があり、もうかるということを第一義的に考える利己主義的なものと見えるのに対し、反面新移住者からは金銭的にこせこせして、相当の資産があるのに細かく、単に労働力の供給源としてのみ考え、すべて自己の通つた道を押しつけようとするとして反発する。

(2) 新来の移住者から見ると、戦前の移住者が、日本の農業から見れば、一見かなりおかれていると見られるブラジル農業に盲従するだけで時に新来移住者の契約不履行を平気で押しつける頑迷さを批判している。

(3) また戦前移住者が新来移住者の考えてきたものよりはるかに物質的に豊かであり、これに比較した場合自分の現在の姿をもつと優遇してくれてもよい筈という期待外れ等がかさなり合つて、両者の底流にあつて軋然不満となり批判となつている。

そのほか、「受入耕主が、自分のたどつた道や、その経験等を引き合いに出し、それを押しつけようとする不快感、時に営農面に限らず私生活に至るまでの干渉」「時に契約の不履行、安給料で酷使し過ぎる」「労働の集約に終つて、何んら将来への発展に対する能力も努力もない」

といつた意見が多く今後の移住者導入に當つて、これら、受入側、雇用農側ともによく相手を理解して行かねば、その壁は益々厚いものとなり、今後の雇用農移住の不振への要因ともなる恐れがある。



